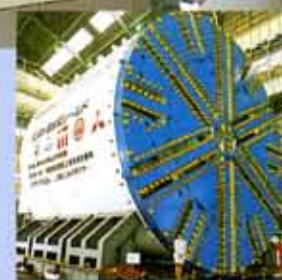


# 大津放水路 トンネル& 琵琶湖博物館

親子  
見学会  
実施



事務所内で熱心に説明を聞く児童たち



シールドマシン



滋賀県立琵琶湖博物館



## 壮大な自然との関わりを通して、より安心な暮らしと地域発展に寄与する土木事業の大切さを学ぶ。

(社)日本土木工業協会 関西支部では、去る8月24日に小学校3年～6年生を対象にした現場見学会を開催しました。

今回は、近畿地方建設局が進める大津市市街の治水対策事業で、関西最大の規模を誇る「大津放水路トンネル」と、400万年に及ぶ琵琶湖の歴史にふれることができる草津市の「滋賀県立琵琶湖博物館」。

応募にあたっては、一般新聞と共にインターネットを活用。予想を超える205組の参加申し込みがあり、新聞記者を立会人として、厳正な抽せんの結果40組80名の参加となりました。

見学会は京阪神の各地から集まった小学校3年～6年生とその保護者、記者、広報委員らは、2台のバスに分乗して予定どおり9時にJR新大阪駅を出発。現地に到着までの約1時間30分の間、車内で用意した大津放水路トンネル説明ビデオを見ながら賑やかに現地へ向かいました。

10時30分に大津放水路トンネルに到着。まず、工事事務所では菅沼建設監督官と、施工を担当している共同企業体の中川所長らによるシールド工法などの説明がありました。なかでも、西日本最大のシールドマシンを“巨大なモグラ”に例えたシールド工法やその歴史などについての説明は、大変分かりやすく、子供たちも真剣に聞き入っていました。このあと一行は、予め用意した「調査隊手帳」を片手に、中川所長らの案内で、2組に分かれて現場へ。

### トンネル先端でうなりをあげる 巨大なシールドマシン、その迫力に大人も子供も圧倒。

長く巨大なトンネル内を通過、シールドマシンを管理する制御室・運転操作室などを見学。トンネル先端で動いているシールドマシンの轟音や設備を見て、子供たちは「地下にこんな大きなトンネルが掘られていることにびっくりした、自分たちが小さく見える」とヘルメットの下から、興奮した顔で話していたのが印象的でした。

見学終了後、主催者の畑山広報副委員長から「よ

り安心な暮らしと地域の発展に寄与する建設産業を、大人も子供も一体になってその大切さを学び、理解してもらうためにこうした活動を行っています。ぜひとも参加者にとって楽しく、有意義なものであるようにと期待します」と挨拶。続いて、「放水路に流された魚はどうなるの?」と言った子供らしいユニークな質問や、保護者からも質問が寄せられましたが、スタッフもユーモアを交えながら、ひとつひとつ丁寧に答えていました。**琵琶湖博物館で、自然・歴史の素晴らしさに出会う。**

午後から訪れた琵琶湖博物館では、展示室と水族館の施設内部の説明を受けた後、館内を見学。400万年に及ぶ琵琶湖の生い立ちや淡水の生き物

たちなど多数の展示コーナーがあり、子供たちは琵琶湖の歴史・文化・自然など様々な角度からその素晴らしさを学んでいました。また、体長1.5メートルの琵琶湖だけに生息するピワコオオナマズや、恐竜の化石の展示物に実際に触れることができ、大喜びでした。

参加された大阪市の豊島君から「とても親切に教えてくれたおかげで、夏休みの自由研究ができました」、同市須賀君から「放水路トンネルの想像以上の規模にびっくりしました」、東大阪市泉さんから「日頃見る機会がないトンネルの中や、皆さんのお仕事の様子を見せていただき親子とも良い勉強になりました」、など嬉しい返事をいただきました。

### 大津放水路の概要

大津放水路は、大津市市街の治水対策事業として、三田川から子川までの日河川を対象に計画された、琵琶湖総合開発計画に位置づけられている。日河川は琵琶湖に干渉係を有し、その流域面積は15.2km<sup>2</sup>にも及び、この流域は古くから交通の要衝として栄え、また現在は京阪神の近郊住宅地として急速に発展している。しかし一方では、流域の保水能力が低下し、同時に洪水時の安全性も低下しているため、早急な治水対策が望まれていた。世帯化の著しいこの地域では、堤防の増設や堤防の築上げは非常に困難であるため、洪水を日河川の中流部から分水して湖田川に放流する大津放水路が計画された。大津放水路は、流域の重要性と安全性を考慮して、100年に1回起こるとされている大規模洪水にも耐えられるよう設計されている。



資料提供：建設省近畿地方建設局 琵琶湖工事事務所